冒頭発言

辛島　昇

「世界単位」という、非常にチャレンジングな概念の提起の持つ意味は、これを如何に捉えていくかということに尽きるだろう。この言葉が現実に何を意味しているのか。「世界」を切っていくのか、あるいはその一つ一つが「世界」なのか。「世界単位」という言葉からは、その内容は明確に伝わってこない。ただ、そこで考えられている内容は、非常に興味深く拝聴した。いわば全く新しい概念がここで形成されつつある。だからこそチャレンジングであり、成熟しきれない魅力と混乱があるのだろう。

では、そこにどのような問題が見られるのだろうか。「世界単位」で表そうとするものは、“ある時代のある土地に生きてきた人間が自分の世界をどう捉えたか”というものなのか、あるいは“研究者が世界を分けて見るための単位”を設定しようというものなのか。おそらくその両方が含まれており、そのどちらに起点をおくのかが明確ではない。私個人の意見を言えば、現在の歴史学の状況から考えても、個々の時代のある地域に生きた人間の意識に焦点を合わせた方が、非常に面白い研究ができるのではないかと考えている。

さらに、世界をどのような面で捉えるのかという問題も残されている。それは生態システムなのか、社会システムなのか、あるいは文化システムとして捉えるのか。ある人間が「世界」というものを自分のアイデンティティという局面で捉えた場合、それは社会的なアイデンティティか、文化的なアイデンティティか、という混乱もあるだろう。あるいは中国の儒教やインドのヒンドゥーイズムという、非常に大きな文化的なアイデンティティで考えるのか、もっと小さな親族や言語のようなアイデンティティで捉えるのか、というレベルの問題も出てくる。このような問題を整理しておかなければ、同じように議論していても食い違いが生じてしまうだろう。

いずれにしろ、概念自体を詰めていかなければならない段階において、「世界単位」によって南アジアを議論しろと言われても、南アジア研究者としては困惑するしかない。むしろ今日は「世界単位」という概念の原点に戻って、南アジア研究者からも自由に討論し、この概念がさらに深まり明確になってくるような議論が進行することが望ましい。その原点というのは、おそらく「くくる論理」「わける論理」「つなぐ論理」という、三つの論理で考えられるだろう。南アジアをこの三つの論理で捉えてみることは、我々南アジア研究者にとっても有意義な試みとなるだろう。東南アジアでは、おそらくバラバラな世界を「くくる」という意識から、このような研究がなされてきた状況があると思う。南アジアはそれとは対照的に、「くくる」ということが無前提的にあり、そこから議論が出発してしまっている。この二つの地域において三つの論理を考え、実りのある議論が展開できればと思う。